

霊 聲

れ い せ い

2007年5月(第170号)

北米ホーリネス教団
OMS Holiness Church of North America
www.omsholiness.org
reisei@omsholiness.org

御霊のことばをもって御霊のことを解くのです。(コリント第一2:13)

～教団委員長に就任して～

三つのビジョン

リック中馬

(ロサンゼルス教会 牧師)

常務委員会を代表して皆様にご挨拶をいたします!

この度、新しい教団委員長に就任した、リック・中馬です。私は、皆様に簡単な自己紹介と、また私の任期中に実現したいと願っている三つの目標について紹介させていただきます。

私は、北米ホーリネス教団を愛しています。この教団の教職者として働くことに勝るものは他に有りません。私は、サンディエゴ日系キリスト教会(まだサンディエゴホーリネス教会と呼ばれていた時代)で育ち、一九七六年八月に持たれたユース・キャンプでクリスチャンになりました。ユースの時代には、EMC(ホーリネス・ユース委員会)や母教会で奉仕をしました。



その後、サンディエゴ州立大学で言語学を専攻し、ベテル神学校西部分校で修士課程を修めました。神学校を卒業した後、私は北米ホーリネス教団に加入し、副牧師として一九八九年九月にサンロレンゾ教会に任命されました。そして一九九一年七月に按手礼を受けました。

サンロレンゾ教会にいる間にタルボット神学校で牧会学の博士課程の学びを始め、一九九七年一月に結婚と家族ミニストリーの分野において博士号を取得しました。一九九五年五月、私は主任牧師としてロサンゼルス・ホーリネス教会に任命されました。また幸いなことに、キャシーと結婚し、今

では二人の子供ティモシー(五歳)とケイリー(四歳)がいます。さて、私たちは将来に目を向ける時、三つの領域における神の働きを見たいと願っています。

一番目は「一致」です。私たちの教団にとっての祝福は、ほとんどの教会が一つの屋根の下に二つの群れを持っていることです。このことは、私たちがキリストにある一致を示すことの出来る素晴らしい機会です。私の祈りは、日本語部、英語部がお互いの言語の違いを認め合い、御霊による一致に留まることです。また、主のためにプロジェクトを行う際には、パートナーとして「共に」神に求めるものでありたいと願っています。

二番目は、「情熱」です。それは主に對して、失われた魂に對して、地域教会に對して、教団に對しての情熱です。また常務委員会としても、どんな事に對しても主への深い情熱をもって行動していきたいと願っています。また教団としては、常に福音宣教が最優先事項として私たちの考えの中にあるようにと願っています。

良い建物、巨大な予算や多くの

スタッフを持つことは素晴らしいことです。しかし忘れてはならないのは、失われた魂への福音宣教のために、それらがあるということとです。この情熱は、私たち自身の中に見出す事の出来るものであり、全ての活動を導くものです。

三番目は、北米ホーリネス教団が、世界中に福音を「拡大」していくことです。感謝なことに、私たちは素晴らしい牧師とユースコワイヤー、また日本ホーリネス教団、ブラジル・ホーリネス教団との強固な関係を持っています。また台湾、インド、韓国、日本を含む世界のホーリネスの群れとの関係作りに取り組んでいます。(Chiyeko Takayoshi とスタッフの働きに感謝します)

また私は、ある地域教会のニユスレターの特集を通して、多くの短期宣教、夏期宣教のために働く宣教師(独身者と既婚者)の働きを知りました。なんと素晴らしいことでしょうか。私たちの教団が、「出て行って」、「全ての国の人々」を弟子とすることを、決して忘れることがないようにと祈ります。

私が教団委員長の仕事を引き受

けることを決めた一番の理由は、主が私に「かけ橋」になるようにと召して下さったと信じるからです。これからの二年間、私は常務委員会と地域教会とのかけ橋となることで、教団に仕えていきたいと思っっています。そして常務委員会は、日語部と英語部、それぞれの牧師との橋渡しとなることを願っています。さらに常務委員会が北米ホーリネス教団と、世界中のホーリネスの群れとの橋渡しとなるようにとも願っています。

どうぞ、このことが実現するようにお祈りください。私たちは、皆さんに仕えるためにここにいます、ですから皆さんの地域教会に関することなど、どうぞご自由に私にでも、あるいは常務書記のヴァーノン・カム博士(英語部)、藤岡二郎師(日語部)までご連絡ください。

教団委員長として、私の心からの願いは、教団の祝福のために私たちが「一致」「情熱」「拡大」を求めることです。

全てを神の栄光のために。

OMS 北米ホーリネス教団

新機構 その解説

文：溝口俊治

I. 今日までの教団の歩み

A. 監督制：一人の指導者によってリードされた時代(過去)

私達の北米ホーリネス教団は一九二一年に産声を挙げました。その初期の教団をまとめるために、私達は当時の日本ホーリネス教団にならって監督制をとりました。監督制とは一人の監督がその教団の最終的決定権をもち、霊的なリーダーシップを発揮してグループ全体を導いていくところに、その特徴がありました。

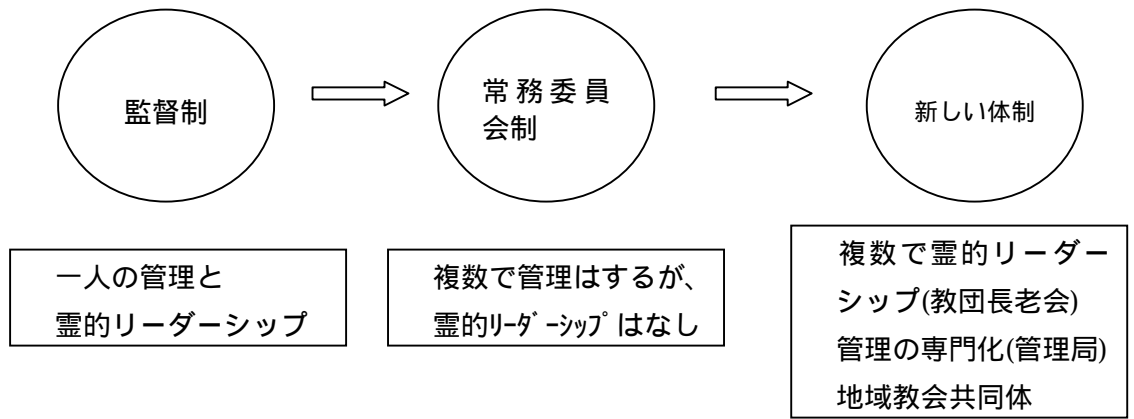
B. 常務委員会制：複数の委員によって管理されている時代(現在)

戦後になって、英語部が起ころれて日語部との会員数が逆転するようになり、教団の体制が監督制から委員会制へと改正されました。それによって、決議の最終的な決定権は教団総会に委ねられ、教団を管理するのは、委員会での合議によって進められることになりました。委員会制への移行によって、決議が一人から多数へ委ねられました。

しかし、同時に霊的なリーダーシップがなくなり、委員会は事務的なことを管理、処理する集まりとなっていました。また、教団の教会数が多くなるにつれ、委員会で決められた事が、各教会に行き届かなくなってきました。

C. 新しい制度：賜物にに応じて、それぞれがはたらきを負い合う時代(将来)

新しい制度は、これらの私たちの歴史を踏まえて熟慮され、まとめられました。



・新しい制度の中心にあるもの
A. 各教会の聖霊への応答を助ける
委員会制では、まず第一に管理
する事が求められてきました。そ

ここでは目の前にある事務的な議題ばかりに目がいき、各教会の霊的な現状や必要というものを知り、話し合う時間を持つことができませんでした。委員会の話し合いの中心が常に事務管理に向けられていることから解放され、各教会が聖霊の導きに応答していく事のお手伝いをさせていただくという教団の最も大切な姿を取り戻すことがこの新制度には盛り込まれています。

B. 教会間の関係を深める

新しい機構では、教会間の関係を深めるようにという事が強調されています。なぜなら、それによつてキリストの体なる教会のまことの姿が形成されるからです。現在、教団の諸教会は互いが各々キリストの肢体の一つであるということをもつて一度、確認する時なにかもしれません。そのために、地域教会の関係が組織的ではなく、生きたものとなって、互いを知り、祈り、助け合つて共同のミニストリーをしていく必要があります。

C. 管理の充実化

また、教団全体の事務管理ということに対しても責任の所在が一

つではなく、これまでも教会とのコミュニケーションに色々な問題が生じてきました。現在の常務委員会では、教団管理をミニストリーと共にしていますが、その管理部門、たとえば財務、教育出版、福祉などは専門化していき、諸教会の必要に迅速に応じる事が出来るようにします。そのためにフルタイムの人材をこのポジションにおくこととなります。

D. 教団において核になるべき霊的リーダーシップの育成

新機構で最も大切にしていることは「育成」です。そして、そのために教団の中に常務委員会体制では強くなかつた霊的リーダーが与えられる必要があります。そして、監督政治とまったく同じということではありませんが、複数による霊的リーダーシップが確立して、管理先行から、霊的な事が先行していく事が考慮されています。それによつて、今日まで私達を導かれた神様のみ心がさらに、その実現に近づくことでしょう。

・新機構と将来

A. 人材の育つ教団と教会

上記にも言われているように新

機構の大切に行っていることは、人材の「育成」です。教会でも、教団単位でも、常に救われた人々が、管理されるよりも育成される事を先行させます。教会と教団の成長は、人と教会の数が増えてくることによつても見えてくるでしょうが、それらに先立つことは、まず私たち一人一人がクリスチャンとして育成されていくことです。

B. 地域における諸教会の権威と義務

今まで、教団総会が与えてきていた常務委員会への権限は、地域教会グループに移っていきます。諸教会は、神様から与えられた権限と責任をわきまえて神の導きに従っていきます。

C. 現場の遂行力の発揮

特にミニストリーに関しては、ローカルな共通の現場に携わっている地域諸教会が、その地域に合ったミニストリーと伝道を見いだして実行に移していくことが期待されます。その中には、牧師の任命も入っています。教団は、諸教会が牧師をどのように迎えるかを手助けします。そのために教職の受入れを地域教職委員会と教団長老会、正教師会がお手伝いします。

新任牧師の紹介

主の導きのままに

島田 直 (しまだ すなお)
(サンロレンゾ教会 牧師)

私は沖縄で生まれ、沖縄で育ちました。私の父と祖母はユタ（沖縄の霊媒師）信仰者でした。私は人の信心を利用して莫大な利益を得ている新興宗教、そして占いで先祖のたたりと偽り、人に恐怖心を与え、人をがんじがらめにしていくユタ信仰に嫌悪感を覚えていました。そのため私にとって宗教は必要ないものと思っていました。しかし一度も教会に行ったことのない私が、なぜかは知りませんが、もし神を信じるならイエス・キリストだろうな、真の宗教があるとしたらそれはキリスト教だろうなと漠然と思っていました。

私は高校を卒業し、一九七五年にアメリカ留学しました。アメリカ

力では親戚の家に世話になりましたが、その家が熱心な日本の新興宗教の信者でした。彼らは日曜毎に私を熱心に彼らの集会に誘いました。私は新興宗教に嫌悪感を覚えていたので、彼らの勧誘を避けるため、学校の友人から誘われていた近くにあった日系人教会のサンロレンゾ教会に出席しました。

私が生まれて初めて教会に行つた時、礼拝後、すでに八〇才を越えた一世のおばあさんが満面の笑みをもって、私を心から歓迎して下さいました。私はこのおばあさんの心からの笑みに感動し、私もこの教会に来て良いのだと思い、それから欠かさず教会に通うようになりました。

教会出席するに連れて、イエス・キリストのことが分かると同じ時に自分の姿が見えてきました。今まで人間だから仕方ないと思っていたことが、神の御前では罪であることがわかるようになりまし。しかし二〇〇〇年前のイエス様の十字架がなぜ今の私の罪と何の関係があるのかがはつきりしませんでした。

その様な中、一九七六年のマントハーマンの修養会に参加する機

会が与えられました。その修養会でイエス様が神であられ、時間を超越し、今も生きて働いているということをガラテヤ二章二〇節から聖霊様によつて教えられました。そして同時に自分の罪が示され、その罪を悔改め、イエス様が私の罪のために十字架で死んで下さったことを心からすなおに受け入れました。

そして翌年の一九七七年十二月二五日にサンロレンゾ教会にて中野雄一郎牧師より、洗礼を受ける恵みにあずかることができました。



洗礼を受けた後、一年間は喜びに満たされ、信仰生活をしていました。しかし、いつのまにか信仰生活もマンネリ化し、喜びが薄れて行き、世の楽しみを求めて、世のものに目を奪われて行くようになりました。その時の私の信仰状態は、神がアダムに「あなたはどこにいるのか」と問われた時、アダムが木の陰に隠れ、神を避けたように、私も神を避けていました。

そういう信仰状態の時、一九七九年のサンタバーバラ修養会に参加するように導かれました。気の進まない状態で修養会に参加したにもかかわらず、主は説教者を通して私に語りかけて下さいました。「あなたがたの肢体を不義の武器として罪にささげてはならない」（ローマ六章十三節前半）という御言葉でした。わたしは内側の罪を示され、悔改めの祈りをする事ができました。そして悔い改めの後に、今度は「むしろ、死人の中から生かされた者として、自身を神にささげ、自分の肢体を義の武器として神にささげることがよい。」（ローマ六章十三節後半）の御言葉が強く示され、献身へと導かれ、今日に至っています。

栄光在主！

日本開国に貢献した人々

オレンジ郡教会牧師 杉村 宰

今回は会津戦争（一八六八年）の際、賊軍として辛酸をなめた会津藩の焼け跡のような状況から不死鳥のように飛び立ち、日本建國に深くかかわった人物たちを通して、キリスト教と明治維新との関わりを記してみたい。

その人物とは山川捨松である。一八六〇年に会津藩家老の末娘として生まれた。彼女の長兄の大蔵は東京高等師範学校校長であり、次兄、健太郎は東京大学の総長として日本の教育界の指導者として活躍している。健太郎は新政府が北海道の開拓使で働く人材を育てようとしている時に選ばれ、一八



七一年一月に他の十名の者たちとアメリカ留学を命じられている。

同年、函館戦争を勝利に導いた黒田清隆らが発起人となって女子留学生を募集する計画が立てられた。期間は十年で、すべての費用が官費で支払われるというものであった。それに捨松が選ばれたのだった。当時彼女は十二歳であり、その一行の中には八歳の津田梅子も入っている。彼女は後に津田塾大学を創設することになる。捨松にとつて幸いだったのは、兄健次郎が既にアメリカに居たことである。捨松は岩倉使節団と共に同年十一月にアメリカに向けて出立する。

捨松は学びのためにコネティカット州のニューヘイブンのレオナルド・ベーコン牧師の家に預けられることになる。なぜ牧師家庭に預けられたのかと言うと、兄の健太郎が彼の留学先のエール大学の東洋通の関係者に捨松の滞在先の依頼をしていたのと、それらの友

人で彼らの共通した友人がベーコン牧師であったことがその一つの理由である。また当時ワシントンにいた公使の森有礼（ありのり）も東洋通の人材にコンタクトを取っており、それらの人々がやはりエール大学関係者だったこともあり、結局ベーコン牧師ということになったのである。ちなみに森はクエーカー教徒であった。クエーカー（フレンド派）は私たち北米ホーリネス教団のオリジンでもある。

捨松はやがてニューヨーク州にある女子名門校パツサーカレッジに入学し、そして四年後には卒業生代表として論文を読むまでになっている。捨松はアメリカの大学の学位を取ったアジア人女性の第一号である。十一年のアメリカでの学びを終えて帰国してからは、陸軍参議の大山巖と結婚し、鹿鳴館の花となって活躍する。大山は後に日露戦争の時の満州軍総司令官となり、日本のナポレオンとまで呼ばれる。

さて、前置きがずいぶん長くなってしまったが、そろそろ本題に入ろう。そのベーコン牧師である。一八七三年に明治政府はキリスト教解禁の法令を発布している

が、実はその草案を作成したのは、ベーコン牧師である。もともと森有礼であり、それにベーコン牧師が手を加え、まったく新しいものにしたのである。日本のマグナカルタは、捨松の滞在した牧師宅から産み出されたものであった。

日露戦争終結のために開かれたポーツマス講和条約がニューハンプシャー州のポーツマスで開かれたが、その講和条約の草案者の一人に捨松がベーコン家で共に生活した末娘のアリスの義兄でエール大学の教授ウーズレイがいる。

もともとアリスもハンプトン師範学校の校長という重責にありながら、日本女子教育のために二度も日本を訪れては津田梅子や捨松を助けている。アリスは捨松の生涯の友であり、三六年にもわたつて文通が交わされてきたのだった。彼女は捨松の絶えざる心の支えであった。もう一人の兄、ジョージ・ベーコンはペリーが浦賀に現れた三年後の一八五六年に海軍付牧師として軍艦「ポーツマス」で日本を訪れている。ベーコン家の人たちと日本とは、目に見えない深い絆で結ばれていたのである。



聖霊に導かれて

大川道雄

(引退牧師)

を押し、その保証として、わたしたちの心に御霊を賜ったのである。」

(第二コリント一章二一、二二節)
「しかし主に向く時には、そのおいは取り除かれる。主は霊である。そして主の霊のあるところには、自由がある。私たちはみな、顔をおいなしに、主の栄光を鏡に映すように見つつ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく。これは霊なる主の働きによるのである。」

(第二コリント三章一六、一七節)
これは、まさしく私の信仰生涯そのものであります。「見えるものによらないで、信仰によって歩いて」来しました。(第二コリント五章七節) 信仰は進行、親交、深耕です。「この宝を土の器に持って。」

(第二コリント四章七節)
「御霊の法則が罪と死の法則から私を解放してくれました。」

(ローマ書八章一節)
十二歳の時、心から罪を悔い改め、イエスを主として受け入れ、大きな救い、罪の赦し、神の子の自覚を経験し、十三歳で献身し、

聖霊のご訓練の中で、教会に仕え、

学びと訓練をさせていただき、二歳で(大学卒業後)東京聖書学院へ、二五歳で牧師を始めましたのは、すべて、素晴らしい聖霊の働きでした。(高校進学、大学進学、聖書学院など、これら一つ一つのこと、結婚、育児、牧会もすべて聖霊のお導きの中になされてきました。「すべてのことが相働いて、益とさせていただき」(ローマ書八章九節)「勝ち得て余りがある」(ローマ書八章三七節)生涯だった、と確信しています。

伝道者生涯四三年(米国で三一年)のすべてが、聖霊のお働きであったと思わざるを得ません。「神は愛する者を訓練なさる。」(ヘブル書十二章六節)ことを充分承知しております。何度か、やめようと思ったこともありますが、そのつど慰めと励ましが豊かに注がれ、支えられてきました。牧師に引退はないことを知っており、「燃える心」は一向にさめません。肉体の支えられる限り、日本人の救いのために、戦わせていただきたく思っております。

四月からは、名古屋の郊外で牧会のお手伝いを始めます。

追伸

わが妻は、私の伝道生涯四〇余年を支え、助け、共に苦勞してきてくれました。聖霊は妻のような存在です。ある時はやさしく、優雅で、ある時はおつかない(お家内)存在です。私はすべてのこと(?)において聖霊の細き御声に従って来た。家内の声は聖霊の声(!!)でした。

北米宣教三一年、サンタクララ、サンディエゴ、ノースカウンティ、ロサンゼルスは、苦しくも楽しい家内(聖霊)との旅でした。聖霊が共にいてくださった。「聖霊があなたに降る時、力をうけて・・・地の果てまで、わたしの(主の)証人となる。」(使徒行伝一章八節) ハレルヤ! 浜松にて



奥様と共に

私は、五〇歳を越える頃から、神さまを三位一体で捉えることに、以前にもまして深く執着するようになった。「父なる神が計画し、御子イエスが実行し、聖霊は信じる者の心の中に実現してくださる。」という基本である。
父なる神の旧約聖書、御子イエスの福音書、パウロの手紙を始めとする聖霊の働きである。
一週間の中行われるメッセー
ジの組み立てを、この三位一体(旧約、福音書、パウロ、その他の手紙)を盛り込んでいくことにして来た。それは今も(日本でも)変わらない。
「あなたがたと共にわたしたちを、キリストのうちに堅く支え、油を注いで下さったのは、神である。神はまた、わたしたちに証印

牧師リトリート 2007年1月29日～2月1日

報告・中尾邦三

今年の牧師リトリートのテーマは「伝道」で、一月二十九日(月)の夜は「伝道のスタイル」について学んだ。調査用紙を使って自分の伝道スタイルを発見し、スタイル別のスモールグループを作って、自分たちのスタイルの長所や弱点について話し合った。

三〇日(火)午前中は「伝道の対象」について、日英両語にわかれてディスカッションを持った。日本語部は大倉信師が、英語部では山下レスター師がリーダーとなった。英語部では「日系人」、「アジア

人」、「近隣のすべての人」などと、伝道の対象について違いが見られたが、日本語部では「日本語を話す人」ということで一致した。「日本語を話す人」の中には、在日韓国人でアメリカに來られた方々や台湾出身の日本語を話す方々なども含まれるので、こうした方々に配慮すべきことに気付かされた。まだ教会のない州に点在している日本人への伝道についても話され、まずは、自分の教会から他州に移動した人々を訪問することから、教会のない地域の日本人への伝道の足掛かりを作っていくことで同意した。しかし、そうした訪問にしても、経済的、時間的に困難なことがあるので、教団からの経済的支援や、他州訪問中の牧師にかわる説教者派遣などの霊的支援が必要なが指摘された。

三〇日午後は、古山隆師のリードのもと夏期修養会についての話し合いを持った。

三〇日夜のディスカッションでは、関真士師のリードで「伝道の方策」について話し合った。(英語部は益

田デール師がリード)いくつかの教会の伝道への取組みが紹介され、伝道におけるコミュニケーションの問題、礼拝を求道者向けにすることの是非、マスメディアやブログを使つての伝道などについて話しあわれた。伝道の方策は、教会の置かれた環境やその成長の段階、牧師に与えられた賜物によつて異なってくるが、それぞれに有益な



情報を得ることができ、互いから学ぶことが多かった。

ディスカッションは、三一日(水)の午前中まで続き、日本語部は藤岡二郎師、英語部はジョー・ロバーツ師によつて「協力伝道」についての話し合いが導かれた。日本語部のディスカッションでは、英語部との協力伝道、地域での教派を越えた協力伝道についての実例が提示されたが、教団内での協力伝道については、具体的な事例や計画を話すことができなかった。三日の昼食後、日英両語の各リーダーが三回のディスカッションの結果を発表し、まとめをした。

三一日の夜は、島田直師と関真士師の正教師会への受け入れを承認し、狭間ローランド師の技手を承認した。石原クレグ師の辞任の報告もあった。

二月一日(木)午前には、教団財務にかんする説明と、機構改革についての意見交換があつた。大川道雄師と篠田リリアン師の日本での伝道のため、イスラエルに留学する山口光師のために祈り、散会した。

教団ニュース

二〇〇七年教団総会

七月十三日(金)～一四日(土)

正教師会 七月十二日(木)

会場：ウォーナツクリーク教会

サンタバーバラ夏季修養会

七月四日(水)～七日(土)

講師 工藤弘雄師

主題「キリストの勝利に生きる」

録期間三月二十五日～五月二七日

ハワイ聖会

六月三〇日(土)～七月一日(日)

右同

教会ニュース

鈴木栄一牧師(ホノルル教会)
リタイヤメント記念パーティー
が八月四日(土)、ホノルルで開

消 息

上村和男牧師(引退牧師、ハワイ)現在、週三回の透析治療を受けています。お祈りください。

催されます。

ハワイでは、二〇〇七年十月一

九日～二二日、ハワイ・リバイ

バルミッションが開催されます。

スタン宮本牧師(英語部)は、

七月よりウエストオアフ教会の

牧師として就任します。

オレンジ郡教会は今年創立三〇

週年を迎えます。そこでこの九

月に記念集会を計画しておりま

す。そして証し集、さらに週報

に書き続けてきたコラム「石叫

」の出版を予定しております。お

祈りくだされば幸いです。

教団所属教会

(カリフォルニア)

フリーモント教会
サンロレンゾ教会
サンタクララバレー教会
ウォーナツクリーク教会
ロサンゼルス教会
サンファナンド教会
サウスベイ教会
ウエストコピナ教会
ウエストロサンゼルス教会
オレンジ郡教会
ホイッティア教会
サンディエゴ教会
ノースカウンティ教会
(ハワイ)
ホノルル教会
ウエストオアフ教会
ミリラニ教会
(アリゾナ)
ツーソン教会
(詳しくは www.omsholiness.org
を参照)

通信員募集

山口光牧師(ノースカウンティ教会)は、六月で教会を辞し、イスラエルのヘブライ大学に留学をする予定です。今後の先生の学びとご家族のために覚えてお祈りください。

「教会ニュース」を『靈聲』に届けていただく「通信員」を募集しています。各教会で通信員を選び、氏名とEメール・アドレスを編集室までお知らせください。

編集室から

リック中馬師の巻頭言にとても励まされた。ビジョンを掲げる事が出来るということは素晴らしいことだ。今回は2頁増えて8頁となった。じっくり読んで頂きたい。普段なかなか会うことが出来ないお互いだが、霊声がそれぞれの橋渡しになってくれたら感謝だ。それにしても、大川師のように妻を聖霊のごとくに想うとは、なるほど、これが牧会の秘訣か。(真)

